大江山

和泉式部、保昌が妻にて、丹後に下りけるほどに、京に歌合ありけるに、小式部内侍、歌詠みにとられて詠みけるを、定頼中納言、たはぶれて、小式部内侍ありけるに、「丹後へ遣はしける人は参りたりや。いかに心もとなくおぼすらむ。」と言ひて、局の前を過ぎられけるを、御簾より半らばかり出でて、僅かに直衣の袖をひかへて、

大江山いくのの道の遠ければまだふみもみず天の橋立

と詠みかけけり。思はずにあさましくて、「こはいかに。かかるやうやはある。」とばかり言ひて、返歌にも及ばず、袖を引き放ちて逃げられけり。

小式部、これより、歌詠みの世におぼえ出できにけり。

これはうちまかせての理運のことなれども、かの卿の心には、これほどの歌、ただ今詠み出だすべしとは、知られざりけるにや。

（『十訓抄』）